

ごちゃ混ぜの効用

千葉大学 予防医学センター 近藤克則

多様性（ダイバーシティ）という言葉聞く機会が増えた。「ごちゃ混ぜ」と呼ぶ人もいる。性別、年齢、障がいの有無、人種、性的指向から、キャリアや立場まで幅広い。「誰一人取り残さない」社会をめざす国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」や地域共生社会などもある。企業でも、多様な商品の少量生産にシフトし、労働力人口の減少や激しい環境変化の中で生き残るために、多様性が求められている。

研究の世界でも、異なる分野の研究者が参加する学際的研究や産官学民という立場が異なる者たちが参加する研究会・学会もある。そこでは、同じ分野の研究者だけが集まるタイプの研究会・学会とは違ったことが学べる。

一つ目は、他分野からの学びである。たとえば医学は、疾病や健康という結果は、どのような原因（例えば孤立）によってもたらされるのかに関心を寄せる。しかし、社会科学やまちづくりの分野では、孤立でなく豊かな社会関係という結果に着目し、さかのぼって、その原因を探る。自分の専門分野ではあまり接しない、逆の発想や広い視野に触れるのは新鮮である。

二つ目は、研究者・実践家相互の学びである。対象をプリンに例えれば、研究者は、プリンを集めて、客観的な観察を通じ共通点・普遍性を解明することを重視しがちだ。一方、実践家は、対象に働きかけ、期待した変化を起こすことを目指す。プリンが目の前にあれば食べ、「プリンはおいしい」と知っている。それを研究者は、たまたま 1 回だけの主観的な感想・意見にすぎないと、批判もできるが、「味は食べてみないとわからない」のだ。研究者は、実践家の経験に学び、実践家は、自分が経験していない世界や、なぜそうなるのかという理由などを学べる。

「社会関係と well-being（幸福・健康）」をテーマにした日本社会関係学会が 3 月 19、20 日に千葉大で開催される。社会学や経済学、政治哲学、心理学、健康科学まで多分野の研究者と、コミュニティーや市民社会づくりに関わる行政職や NPO、市民など実践家も参加するごちゃ混ぜ型の学会である。

「選択と集中」では短期的な効率は高まる。一方「ごちゃ混ぜや多様性」には、持続可能性や数十年に 1 度のイノベーションに有利という効用があるのだ。